

市政ニュース

市民グループと対話、

「中貝市長とふれあいトーク」開催

平成21年度から開催の「中貝市長とふれあいトーク」は、気心の知れた仲間と一緒に気軽に市長と話せる機会と毎回好評です。

これを受けて、今年も7月13日から31日の間に6会場で開催しました。平日の時間確保が難しいグループも参加できるよう、今年初めてトークの日程に日曜日を入れました。

公募により、地域の活性化、介護、国際交流などさまざまな活動をしているグループが集まり、高校生や若者グループも参加しました。

それぞれ希望するテーマについて、約1時間、市長と和やかに語り合いました。

みんな同じ想いを持った仲間。ときには笑いもありながら、話はどんどん進みます。

地域でさまざまな活動をして頑張っているグループからは、自分たちの地域への熱い

想いが伝わってきます。

家族を自宅介護するグループの話は切実です。介護制度だけでなく、介護者へのさりげない感謝や支援の一言の大切さも分かります。

高校生グループからは、若者らしい提案が続きます。また、市長職への質問も相次ぎ、市長も苦悩と喜びの日々の話をしました。

市では、地域単位の懇談会などで、多くの市民の皆さんの意見を聴くとともに、このような少数人数での気軽な話し合いの場も設け、「対話と共感」の市政を推進します。



▲高校生とも話が弾みます

「平成23年7月新潟・福島豪雨」の被災地・新潟県三条市へ支援

新潟県三条市と豊岡市は、全国の市町長が集まり、教訓や治水への思いを語り合う「水害サミット」の発起人です。

このサミットでは、水害経験を通して得た知見や課題を生かし、防災・減災の観点から関係機関に提言を行うなどの取組みを続けています。

その三条市が7月の豪雨で多大な被害を受けました。

このため、本市では、8月2日、三条市へ備蓄物資(タ

「平成23年7月新潟・福島豪雨」の被災地・新潟県三条市へ支援

オル、トイレットペーパー、紙おむつなど)を送りました。

また、8月10日から12日まで、泥やごみなどの撤去作業のために、豊岡市社会福祉協議会と共に職員を派遣しました。

なお、三条市は東日本大震災直後から避難者を受け入れており、本市では、4月にランドセルやリュックサックなどを、6月には米・野菜・但馬牛肉を届けました。

円山沿線の内水問題

(住宅地(堤防に守られた内側)に溜まる水)を解析

円山川では、平成16年10月の台風23号による河川激甚災害対策特別緊急事業として、現在抜本的な工事が行われています。

また、平成20年1月には円山川水系河川整備計画基本方針が策定され、現在河川整備計画が検討されています。これらの事業が完成すると、円山川の外水(河川を流れる水)に対する安全度が上がります。しかし、新たに内水問題

が発生するかなどについて、無堤防地等である11区域(中郷、日高町(赤崎、浅倉、岩中、向日置、多田野谷)、城崎町(上山・二見、ひのそ、円山・来日、今津、戸島)を対象に、平成16年の台風23号時の降雨を想定して、解析をしました。

解析では、全区域で床上浸水家屋はなく、また床下浸水家屋も22戸程度となり、大幅に改善されるといいう結果が出ました。

主な市政の動き

7月

13日 中貝市長とふれあいトーク(20・21・25・31日)

15日 ウェブサイト「美人時計」で城崎温泉PR(8月14日)

食の都づくり戦略「ジビエ料理の第一人者から学ぶ会」

22日 タッチパネル「玄さんの『玄武洞講座』設置

豊岡市第5次外国人漁業技能実習生市長表敬訪問

25日 経済成長戦略プロジェクト「高校生等を対象とした企業見学会」

26日 豊岡市アンテナショップのオンラインショップオープン

30日 コウノトリ但馬空港フェスティバル11(31日)

1日 「健康ポイント制度」スタート

2日 「7月新潟・福島豪雨」被災地の新潟県三条市へ支援(10・12日)

「顔でつながり 声でつながり 心でつながる」

「夏休みラジオ体操顔見知り運動」推進

豊岡市青少年健全育成会議連絡会と豊岡市子どもと心でつながる市民運動推進協議会、市教育委員会では、今年度も「夏休みラジオ体操顔見知り運動」を推進し、市内各地でのラジオ体操に、中学生をはじめ市民の皆さんの参加を呼び掛けました。

小学校区や各地区での一斉ラジオ体操を実施しました。一斉ラジオ体操や各地区の取組みでは、中学生による参加呼び掛け放送や体操指導、スタンプ押しなど、スタッフとして積極的に関わっていました。



▲福住校区民大ラジオ体操会(300人参加)

「豊岡には世界に誇れる企業が存在」

高校生などの企業見学会開催

7月25日、豊岡市経済成長戦略プロジェクト「高校生等を対象とした企業見学会」を開催しました。

株式会社オフテクス、株式会社誠工社、但馬ティエスケイ株式会社、東海バネ工業株式会社、株式会社ビトールアンドデーの5社を見学しました。

これは、高校生らが市内の企業を見学して将来の姿をイメージすることで市内企業への就職意欲を高めるとともに、それまでの学業への取組みを促すものです。

生徒らは、製品や工場の仕組み、機械の性能などの説明を受け、就職に当たっての心構えなども聞きました。見学終了後には「日本を代表する技術を持つ企業が市内にあることを知らなかった」「就職のための準備を始めたい」な



▲但馬ティエスケイ株式会社を見学

どの感想を伝えてくれました。参加者の多くが、卒業後に市内の企業に就職されることを期待しています。

中貝市長の徒然日記 ④

被災地への旅(2)

気仙沼のあと、一路南三陸町へ向かいました。南三陸は、豊岡市が今も職員を派遣し続けている町です。

レンタカーを運転しているのは、市の森合防災監です。指さし確認をしながら交差点を渡る基本動作が身に染み込んだ、自衛隊のOBです。修羅場はくぐっているはずなのですが、新たな視界が開けるとか「おおー」とか「うー」とかうなっています。

気仙沼の港もそうでしたが、南三陸は、衝撃でした。

町の防災センターが、鉄鋼の骨組みだけで残っています。町職員のみで残っています。2階の部屋から防災無線で最後の津波にのまれて亡くなられた、その場所です。

痛恨の思い。骨組みの正面に置かれたテーブルの上に風に吹かれながら供えられていたたばこやお菓子里、その思いが込められているような気がしました。

現地の映像や写真は、市民の皆さんも散々見てこられたと思います。被災地で見られた

況について、ここで多くを語り、プレハブの仮設庁舎で仕事を

励し、職場の人たちにあいさつをし、驚くほどの明るさで対応していただいた佐藤 仁町長に「豊岡はいつまでも支援し続けます」と伝えて帰路に就きました。訪問に当たって市職員有志で町職員に差し入れた冷えたトマトがとても喜ばれたことは、幸いでした。

「自分たちの町が好きでたまらない。自分たちの町は自分たちで守る。自分たちの手で必ず復興する」。ふるさとへの深い思いと強い責任感。その深いが、国でもなく都道府県でもなく、市町村の住民と首長・職員の本質であり、真髓なのだ、と被災地の人々から強く感じて帰ってきました。

